

ex 222

系鐵以戲著

穴

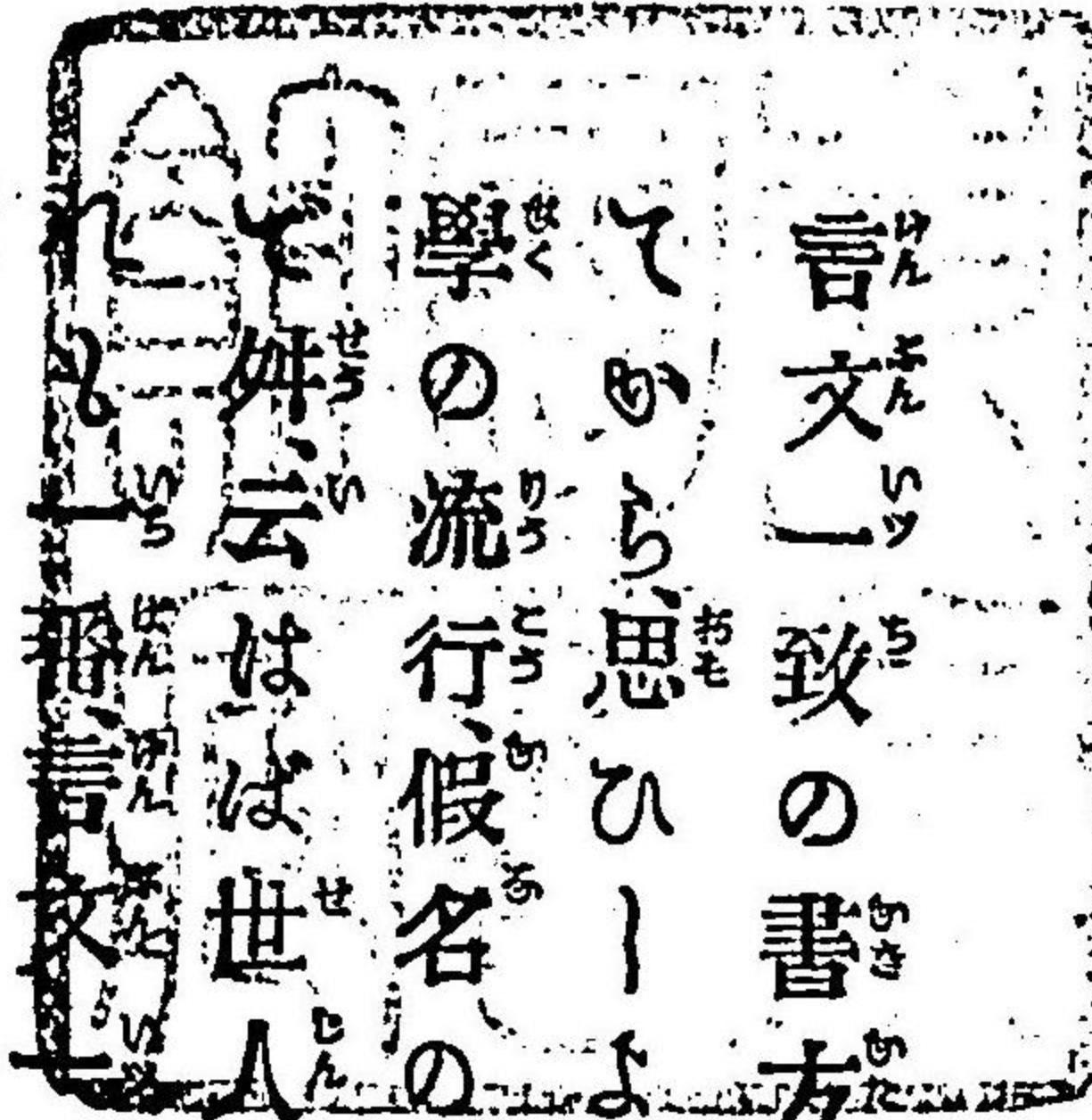
全

大阪  
鑄文館發兌



特 29  
828 No 14586

はしがき



言文一致の書方は二葉亭美妙齋等の大家が初められ  
 ておぼろ思ひより引立て来ましと之といふのも速記  
 學の流行假名の會乃隆盛よ赴いとのが其重なる原因  
 也云はば世人の嗜好が向いたおらの事です乃て已  
 れも一掃言文一致体の文章と出懸ました、  
 文といふ雑誌が出来ておら學といふの友といふ乃情  
 といふのも出来た、一字名は嶋田番と共に當世の流行  
 とすおら已れも穴といふ一字名と出懸ました、



一

大  
 文  
 集  
 一  
 冊  
 全



二  
先づ表題も文章も、當世姿です、流行振です、所が趣向が  
サツパリ面白く無い、甘味も辛味も、滋味も酸味も何よ  
も無い、お茶漬のやうな無味淡泊です、田舎人乃塩辛い  
口よ於ける、都料理です、おたて水ッぽい、  
デスけれど底がソレ、人の嗜好です、十人十色ですもの、  
圓ぼ茶を好く人が有れば、瓜實を好く人が有る、美人だ  
とて一ツには云へない、丁度ソレと一ツこと、此様お水  
ッぽいので、又好く人が有る、お………おも知れ  
ぬと思ふ、おら、ツマリ書けた乃で、如何だらうおと思  
ふて、書いて見、このです、ホンの此册子乃様お乃が、デモ

著述です、閑だ、おら著述デモの、デモ著述です、  
讀者おみゆるし下されへ、フン穴、馬鹿げ、著述だト、鼻  
でおあたらひなされお、流行に阿ねッたなトお叱りな  
されお、チトとも隠しはしお、皆お白状おまおた、序文  
などお事々お飾らない、  
飾ッとして又別、引立つ著述でもない、お併し鳴許お  
ましう、自分獨顔、勿休ぶる人が多、御覽お、誰やらお、  
剽竊に巧みな誰やらを………  
實いふと、之も小説家の袋の一種で、アレと同様のもの  
です、いたづらばかり書く奴よと、お晒ひ君れな、之をは



まがきと仕て置ませう。

四

戊子之歲第十一月

著者識

附言

序文より別て申上候通り、此冊子は兼て世に公け  
よせし、小説家の袋を取纏める積りで書ゝスケッ  
ク体のものですから、穴と云ふのは當らぬか知れ  
ませんがシカン第百版までも印刷して、近年とな  
ら、グランド將軍の自叙傳の賣高も超す位な事を  
へ乃へサ、此的は題名よりは當るゝ相違ない、ソリ  
ヤ屹とてすよ、トつめられながら、アいたく  
と云つゝ、誌す者は誰てもない、穴の著者サ



目次

第一回	女	第六回	下女附乳母
第二回	細君	第七回	女書生
第三回	寡婦	第八回	娘
第四回	藝妓附妾	第九回	姑附繼母
第五回	娼妓附淫賣	第十回	穴賢
以上			

穴

在浪華 素鐵 公戲著

まへおき  
 ヌレえ何の穴です穴は志こ乃穴でせうの穴おそる  
 志やの穴でせうの但志又天然痘も怨み深き穴でせ  
 うの然んか穴でも無い此穴を取も直さど悪まれ口  
 乃穴ソレも御婦人方よ付ての悪まれ口です粹なお  
 方や通お人は一見なされて「オヤまあ野暮か男だ  
 よ」とお晒ひふさう誰やらが「女子を社會裏面の王



なり「なご云ふて滅相女子を持上しとは事變り女子」と小人とは養ひ難し」と無性な蹴あす方なので、うせ面も面心だても心だて、アンマリ好れる方でも無いから、矢鱈ふられよふられたいので、すイデヤ御婦人方の内幕を發き立て、一ツ下手穿ちよ穿ッて見ませう、さらば御免、

第一回 女

女といふ者は如何な者でせう、アノ根性惡い意地汚い、執念深い疑訝ぶかい、迷ひ易い、狂お易い、亂れ易い者は、女です、女人惡人といふ女は業ふかいと、外面如菩薩内

心如夜叉といふ云ふのは必竟そこで升女子は生來細心小量な者です、小事務を扱えせ、小經濟を預らせるよは至極でせう、デスけれど、逆も大きな物乃役よは立ない、シカシ女といふ者は常に小膽で有あがら、時として大膽である、シカも銳意よ、熱心よ、一心不亂よ、誰が叱らうが、誰が諫めうが、用ひない、聽ない、デスカラ端唄にも云てある。

三味線の糸より細き女氣も戀よ心は太竿や實よ此通りです、御覽あさいよ「惚れよお前よ妾や命てもだの」お前が死ぬあら、妾も何卒、未來は共よ一蓮托生



だ乃と云ふのは、頗ぶる大膽な者です、此一段よふると、  
迎も男を叶はない、

四

女は根性悪い、意地汚い、

大概の家では、女房が赤面です、山の神と云ふ能く云ま  
た、若し女房が留守の時に、夫が義理祝儀など爲ると、目  
よ稜立して、唇を天狗のやうにして「オヤ何です、馬鹿々  
々しいぢやア有ませんか、義理ですッテ……祝儀も糞  
も有ものか、自分の親類だと思ッて……」などと一本参  
るのえ常の事です、交際をするに云ては、顔を皺め、物の  
貸借遣取をしと云て、頬を膨らせます、來客が長髯

だとして、箒を立て、下駄を据たり、又ホタ〜で  
又どうぢ、チトお遊びに……と挨拶して、客を送り、  
かおら、まア長ッ尻で、厭な人ねとお三もろ共に悪口い  
ふのは、何方の女王よも有ることです、が、好悪は最も甚  
だしい、客よユス、い乃は女です、

執念深い、疑念ぶかい、

アノ人、え一度被様事を爲ました、からと不意に、出  
た失敗を、永く記憶よ止めて、心肝よ銘志てゐるの、え、女  
です、コレハ斯です、ト思ひ込んで、固く信じて、動ぬの  
え、女です、一時の恥辱、離怨、すべて斯う云ふ事を忘れぬ

五



のは女です、デスカラ執念ぶかい其様も執念深いから、  
如何しても疑惑ぶかい、一度疑ふたら勿く解ない、ハテ  
難義な者ですわい、

トは云ふもの、極善極悪は女乃能する所です、女で疣  
の好い人は尠ないが、シカシ女の善人は、又捨別あ者で  
す、別て又女は何にまれ彼よまれ、周旋好が多い、  
女は總て感情が鋭い、デスカラ涙弱い、一段の淨瑠璃一  
場の演劇を見たり聞たりしても、忽ち泣くのは女です、  
推量の深い之は疑惑深いお庇で……、デスカラ少しの  
事でも、飛立つ許り喜び消入る程も憂へるので、テも

妙なもの……女と云は制し易い制し難い者で、教育す  
るよりも餘程面倒でせう、

世の中で色気は愛嬌です、又艶です、女は色気の持主で  
す、能く笑ひ能く泣くのを、色気が有るからです、色気出  
た娘は顔と目とて言ひ「コレだもの、どうして〜、アノ  
一顰一笑、アノ秋波一轉、ハテ傾國だわい、一圓のボチと  
投出して、脊中をポンと叩めれたら、墓口は空虚なる  
とも、何乃惜める、女の男を昏醉させる魔薬は、即ち色気、  
其色気は女よ必要、欠くこと乃出来ない、美術心です、先  
づ餘り理屈張るい、て、是位でおさまひよして、ソロ〜



細目よ立入ませう

八

サア之のめらおい〜悪まれ口を利ませうが拙者本  
來女の事と云へば爪の垢程も知り申さる左右ッ思  
案して只出まかせ筆まかせ、ホンの早細工此が一番  
拙作な乃ださうです、

第二回 細君

細君を女房妻、婦ふと云のど上品よ云ふのです、人の  
ワイフをミスツレスと云ふやうなも乃で……サア細  
君乃直打は大概、夫の直打で定まる者です、ドンな娘で  
も細君よあると、落着のえ妙です、日本では細君は三從

といふ習慣法に、檢束されて被入から物見遊山かどよ  
は往けかい、總て人寄の面白可笑、忘い所へは往けかい、  
氣乃取ぐるしい姑よ目を貫はじと釋がけて、何時も何  
時も家よ在て、繪に書たお半様では無いが、始終おそれ  
て居だ可憐さうな者です、上等社會でも下等社會でも  
同じこと、細君と云ふ者を苦勞者です、シカシ舅姑さ  
へ無くば、細君を氣儘放題、芝居蒔蕪薯南瓜の道樂は、お  
さんと差向ひで、無聊の餘よ生る御野心、旦那の留守  
よ矢庭乃留守事は、能く有る事です、旦那内よ在る時は、  
謹慎にして遠慮ぶやく、猫よ遇ふ鼠のやうです、がシカ

九



シ旦那外そとに在ある時は、恰ちかも餓鬼がき大將だいしやうの如ごとくです。おさん  
がホタくして、袖そでの前垂まえだれにお鉢はちなどを隠かくくして往ゆく  
のは、必定ひつじやうお定まりの横町よこまち、今蒸上いまあがりしホツユリの御注文ごちゆうもん  
でせう、之これはしたり、旦那だんなのお歸りかへり、ソチお歸りだよと、下  
女じよめを急立いそぎたて、戸棚とどろ押入おしり火鉢ひばちの抽丁ひきだて、あはて込んで、おめ  
くしをかざる事は、何時いづれでもです、  
以前いぜんは金春こんはると、三筋さんすぢの糸いとで生活くわくわしてゐた者ものです。柄かどう  
せ少しは我慢じまんでせうよ、ト乙おつな處ところよ見識けんしきを取とりてゐるの  
は、困こまり限かぎります、丸挑燈まるてうちんよ何屋なにや何吉なにきち、もしくは小何こなにと記名きめい  
せよ、時分ときぶんも、何爵夫人なにしやくふじんとゐつた今いまも、同じおなじこと、うき川竹かきたけ

十

の浮うく水性すゐせいは相變あひかはらねて、八時はつじの就禱しゆたうよ十時じゆじの出禱しゆたう、  
食道樂くわだうらくを元もとより、放慢ほうまんある舉動きゆうどうは、稍ややしまり善よき下女げぢよめの  
晒草あびぐさです、日曜祭にちやうさい日にちと見掛みかけては、旦那だんな印いんを勸すすめて、演劇行終えんげきぎやうしゆう  
日の放生會にちのほうじやうかい昔馴染むかしなじみの役者やくしやとさん付つでの招待せうたいを、餘り且だん  
的てきを照てらした、踏ふつけた仕方しかたです、  
之これを又また締しまりの無ないこと、癸水つぎのすいのーだらなく、湯卷ゆまきよベツ  
タリお芳よし之これを濯あふてお呉くれよ、餘り感心かんしんせぬ事ことです、其その  
外ほか細君ほさいくんの前帶まへおび「小供こどもの小便蒲團しよんべんかたんを、巨燵こたつよ乾ほせる」乳飲兒ちゆかご  
と抱だいて、胸むねあらはなる儘ままの御挨拶ごあいさつ「寝亂髪みだれかみを解上とせよ、寝  
むた眼まなこでの朝湯行あさゆぎ「物貫ものぬきふて愛素あいそせざる」人中ひとあひで烟草たばこを

十一



喫らせる「帯のじやれ結びなる」「細引のまゝゝある外出客  
あるよ小供を泣せる「亭主や他なる言行」「下男下女よ對  
志ての暴々しき言葉」「出入の人の好悪」「小切糸屑などの  
取亂せる」「他人よ對志て亭主よ褒貶」「之等は婢大明神よ  
能く有ことです、  
他人よ對志て「旦那が斯う仰しやります」「トカ」どうかなと  
いまた「た」トカ之を不敬な言葉です、諱知らぬ女乃言事  
です、憤まんければありませぬ、奥の「自稱も氣障なも  
の」「お主」乃呼棄も厭だねエ、  
之は格別、井戸側會議乃連中よは「近處隣りのあやかし」

「物品を貸し下され」「戸外と戸内との聲高話」「向三軒兩隣  
甲乙の悪説」「小供の喧嘩」の出しやばる「あどは最も  
多く有ことです、  
だが最も悪む可きは間男よ、烹豆の好物です、間男せる  
婢乃素振は、外見では別て其夫と親志いです、シカシ何  
とあう常ないろくしい、嫁入志て後の姦通は、女乃大  
疵です、大砲乃穴より大きな穴です、かう云ふ事は九尺  
二間の女王陛下からは格別、世乃令夫人達よは滅多よ  
かゝ「頼まぬよ舞踏會主が出雲神」と或滑稽家が狂句は  
穿ッてゐるの、穿ッてゐぬの、何に致せ、お利口連の有難



十四  
がる其時々流行神天輪王尊などは勿々周旋家です  
とサ、やりて婆アも及ばないでせう。

第三回 寡婦

「よく結ふと悪く言る、後家の髪と川柳點も有る通  
りです、めへり咲き狂花は能く有る事石塔の赤い信女  
が又孕みの醜聞は世よ有勝ち、後家を立て貞操を守る  
ふど、云ふは天則で無い、再嫁をするを最も至極、シカ  
シ私通は恥とい限りです、

焼野の雉子夜の田鶴其おふところ他で無い、況して  
人間は情める動物、孤寝乃肌寒いも無理でない、隻枕の

聞淋といも無理でない、寡婦だト云て木や石でも無い  
めら………仙人てさへ、久米仙人てさへ、

「佛壇よ御燈を惰れる」亡夫乃葬式に涙強き「忌日乃供養  
を疎めよせよ」知人よ別て親くせる「雇人よ馴々しくせ  
る」物見遊山よ忘ば忘ば出懸る「いつも化粧を薄くも、髪  
を豊やめよせる」すべて何事よ物見高き皆か後家が、  
浮名の種です、

誰やらの親切よ絆されて、誰やらの義理よ搦められて、  
誰やらの二度三度の口説よ否み兼て密と巾着の紐を  
切た後家も有る、アラ情ふの私事や、意地悪くも、木魚講



に加入せしめられた後家も有る、シカシ惡るい手本、貞女を破ッて、貞女を立ととやらは、今さら怨めしいを常盤が心中、ハテ忌々とい、いたえといは後家の子父なし子悪くすると、人に指をさゝれる、デスカラ子が可憐さよ再嫁再縁を能くある事です、又しも戀は其思案の外……

「あう見へても心は比立尼てすよ」ト澄してゐるのも、覺束あい誰あらう、三更夜闌なる時乃機密を知る者の、二十後家は立つても、四十後家を立ぬとやら、ソレも無理でない、紀念わけ、石碑の建立、家の世嗣など、盡力して

くれた、白鼠乃忠七よお膳を据ゑ、準太、上法皇とするは、全く多年の功勞よ報ゆる爲てせう、物數奇か後家は、忌日對夜よ、眞如乃月乃やうに、満圓な頭を振立て、世捨人と、我も言ひ人も言へる、お住持と怪しい中よなると、え、珍志くも無い、而して滅多よ兩夫よ見へぬトハ、うれも其答てす、デスカラ愚痴を陳べてゐる時分が、寧ろ優てせう、矮狗や猫よお伽をさせてゐる時分が、却ッて花か乃てせう、

娘ある後家を最も都合が好い、妾を最う五月蠅から隠居して、娘よチツト早いお養子をする積りてす、途方も



無い「サア事だ養母の腹は孫が出来豈に圖らん娘の婿が我が婿とならうトハ、アレ厭だワア、

第四回 藝妓 附表

藝は身を扶くる程乃不僥倖今え容貌の持切ですもの、清元でも富元でも常盤津でも宮古路でも一中節でも河東節でも鶴賀でも新内でも長唄でも義太夫でも何れ上手でもシンク流行唄がうまくても越中追分が巧みでもサツパリいけない拜金宗で無ければいけない、應頼上手であければいけない、オヤもう正月だよ、オヤお祭りだよ、と言ふ度毎にお物

入、何屋の若旦那が某の髯公を抱込んで一番魂膽手管を施さねばならぬと浪花梅は一錢を散財して旬日前よりの遠謀、ホ印と來てゐる客に充分氣を揉せて置くのも、ハテ罪だよ、

座敷着の衣裳、三味線、撥櫛、笄の類までも、典物よと、賣代よなし、東ならば新駒浪華からは鷹治郎、かれら役者の爲に、裸よあるとは氣が利あひ、夏は肌ぬぎ團扇づひ、冬は巨燵の中、縦よふり横よなり、とツとぎの能弄戯ばなと、艶章の檢閲、無心狀の思案もどきなせるとも、随分愛素が盡やすぜ



其外湯屋で聲高よお客乃誹謗三人五人うちつれて縁  
 日の市を散歩がてら乃能弄戲ばるゑおいて欲しい又  
 口きたふい乃は止て貰ひたい煮豆を袖口が切ますよ  
 アレいやだねエ、  
 箱廻を母親よ任命するのは宜しくふい花よ往く道す  
 がら箱廻と乃ひそく話も下さらぬ  
 苦しまぎれ家よ火の降るも物めえヤケよふッてよい  
 鳥を引ひけながら四苦八苦の上よ工面面工の上よ寶  
 惠駕よ出るとえ之らはア餘ほど物好だわい、  
 ソラ引幕ソラ幟として最負の若役への贈物何チヤンは

小何チヤンと力くらべアノ人が一圓出すのから妾を  
 三圓出しますすさうでかいと鷹さんに濟んさい……  
 コリヤ又妙な意地ですシタガ納税の時は先じて出す  
 者は一人も無い町藝者が殖たとソリヤ口實でせう、  
 此頃は又滅相も無い骨牌の流行勝算はくるひ易く敗  
 北は仕易い盆正月よ晴着の當込え思ひも寄らぬ泣面  
 を蜂ハテ藝妓の所得税とは受取れぬ、  
 めう見へても勿々固いつて褒められてゐる位です  
 ら然う云事はチトとと……トハ云もの、色は思案  
 の外馬鹿らしい妾等を捕まへて口説ふるテ金さへ出



せば身を任すと知らないのねエ、  
 當り前だよ下女上りでは無しさうく安ッぼく云れ  
 ちやア引合あい妾が温和とくして居たものを此處の  
 鼻下長めが受出たて無理やりに圍さんだもの……ナ  
 ンボたわけでも好いておら此様な家おんかへ來るも  
 のお今頃は手鍋さげても情夫と添ふてゐる乃だチエ  
 、自烈とい、  
 旦那と時偶の痴話喧嘩歸して後乃惡口雜言妾根性は  
 厭な者です恩も義理も知らぬよ密な情夫とこしらへ  
 て旦那を輕蔑よし而して一も二も無心いふて奢りち

らしてゐる妾をおく位おら細君を改撰するが優です、  
 妾を持つてゐる旦那は此上もあい鼻下長です妾など  
 は藝娼妓と同様の者ですおら一人や二人の男を持つて  
 ゐる者ではあい、デスカラ輕薄極るおもゑるくもあい、  
 他一男の子を宿忘おら旦那の子と云まぎらせ旦那  
 よこそすりつけるとは、ハテ罪だよ、

羽織おくさ老袖ひきとめお、どうでも今日は往きや  
 んせト云ひつゝ起つて簾子窓障子細目よ引あけて、  
 ソレ見やとやソセ此天氣、  
 うれとえ無しよ急立て旦那を早く歸したがかり歸した



後で舌ペロリ金の切目が縁乃切目だト丸で雪駄サ

第五回 娼妓附淫賣

格子先を歩く人冷評す人は皆お知らぬ人知る人は金ある人ソレも昨日や今日の馴染夜毎も變る其面其心お客は粹も不粹もこきまぜて孰れも愚は無けれども自から蓼食虫の好不好が有るされば色を賣らねばおらぬと情を賣るのは只一人間夫は勤の憂晴ですひきつけの座でお菓子と内証よして狸してある間夫へ送るも心ばかりの親切新造仲ごんなどへの心付をお客よ對して無性よいじるを以の外ですヤレおすしヤレ

お菓子の注文はおもしろくも無い廊下よ於ての呬語隣席での立寄話ハテ氣の悪るい廻し部屋よて粹を利さぬは忌えなき限り墨にて書ける蚯蚓なり乃字のさま望ましくも無い商賣柄として紅筆ころ望ましいくりおへしたる長ぶみさとしてやの定文句味もあいな段梯子の上り下りよ生めきたる聲にて不調子の吟詩夫は又しも片言交り乃英語聞きたくも無い店つきよて皆で乃晚みくら小聲での喧嘩ありの悪い仲ノ町張て澄と切れる洋装しての巻烟草いけすおねエ持部屋よて人知れ老の不行儀肌も露はなる儘乃起居エンパニイの



意豆の供養氣が利ふい浪華で松島新堀東京で吉原其  
 他乃安店より更な下等なる根津の圖子、コ、ラは牛馬  
 視されてゐる極點でせう、  
 姉女郎の顔役たいしたる病よ臥す女郎町風よせる女  
 郎後朝に顔見た時の女郎丸で見られなひ、  
 娼妓と弟たり難く兄より難きは淫賣です地獄白湯も  
 じ十錢これです風よ嗅ぎツケられぬ限りは十五六本  
 の線香を以て町藝妓を立處に應頼と月ぎめの妾だト  
 云て一夜二十錢乃至三十錢で賣淫女が有る是等の子  
 是等の子の親は裁縫も出来ぬ洗濯も出来ぬ出来ぬ出来

ふい譯でも無いよ裏長屋で左團扇の氣樂を遣たいが  
 病です親も親あら女も女不義の金不徳乃衣物夫で姿  
 を扮し体を造れるは破廉恥極る無情無味飛切の動物  
 です親父本來人力渡世おれども仕事よ出懸るは元老  
 院の議官が出頭よりも少ない日數平生を終日天乃美  
 祿を飲んでの樂しみ母親は元來安物女郎なれば老莊  
 乃奥義よ精しく驚なめし事も有るてふ者ゆゑ女が  
 家を罷出る折よは右より左より縦より横より其なり  
 振を直してやりサテ耳よ口忘て錢も取ぬ先から身  
 任しかや成丈嘘を吐くやうよして廻り遠い處から持



て廻ッて無心をお云やぬッてはいぬぞト吩咐  
 ところ勿々上出来です流石は昔どこやら鱈や瘤の  
 出来る程も何千人も枕させたる丈あるテ衣物假着乃  
 節よは汚しなや酒でぬらしなや時間が来たら直にお  
 歸りよ之は今晚の九時から明朝の九時まで乃借物や  
 ぜト三度も四度も繰返して云聞せるは尤もなる倫旨  
 ソレも子が可愛さの事でイヤ口が可憐さのとてイヤ  
 金が欲知のとてす、もう云ふ人の身を取ては子は子寶  
 てす子の腿をひぶる親とはハテ聞えぬ  
 「我子あら他處へは遣じ雪乃朝ソレだよ情をい、まア此

寒空よ、まア此闇夜にうれよ又巡查よ隠れ忍んで震へ  
 て恐怖あがら當ない人を待たせ決らぬ客を引せてる  
 賣淫の親心は如何でせう鬼よ、鬼よ、白面の鬼子の親よ  
 他處の軒下材木竹などの間草の上何處を厭はぬ鶴鴿  
 の交り最下等の動物下品下生する事なす事皆な穴で  
 す、ハテ穴だらけの人間人非人てす犬よ猫よ、  
 清少の草紙中のすさまじきも乃 師走乃月夜女  
 の化粧 今時の清少あらば淋しき巷よ地獄の立る  
 之も書くてせう、蒟蒻の白あへみたやうな顔の質で、  
 孫が泣くやうなのも適よえ有る、



時としては奥様の参謀となり又時と志ては旦那の命  
 婦となり親の命令を左様からの際よ受て天晴そむい  
 ぬ容貌好の孝行者氏なう志て玉の輿の僮倅えおさん  
 お前乃身の上だよトは云へ下宿屋よ奉公してあ  
 や天竺浪人のお伽とあり尻くらひ観音と出掛られる  
 のは此上もないお氣の毒旅舎よ奉公して一夜泊りの  
 お客よ十銭廿銭のボナに惑され身とまわしたが最期  
 不運や情の種を宿し失望落膽する事も有るベンズリ  
 其處のけの顔志て裳もホラく歩く度毎よひなた臭

い時分よは結句氣樂で權助に愚弄される位が、お氣も  
 じの種です、けれど色氣無とてサ……………  
 「奥様よ告げると下女も初手は言ひ」之だも乃、一九が囊  
 中の一品となつたも無理でない、夜這すると云乃と下  
 女の部屋よ限るです、ハテ名譽回復の訴へを起さんけ  
 ればあるまい、  
 井戸側で奥様の影言、下男と牒通志て、お家乃米櫃を傾  
 ける算段、遺物の祝義を私して焼薯のめくし食ひ、誰や  
 らを氣取し結び文を雪隠でのないしよ讀み、お家の買  
 物に出ての盗み根性、之ら甚だ宜志くあ、



親切な美しい番頭などへえ、お茶乃盛を好くし、風呂の加減を元より洗濯の勞を厭はぬは下女根性乃賤しむ可きも乃です。

春秋の四季施二期乃給金之を積んで氣の知あふた人と申睦じう暮したい之を貯めて置いて身姿も可かりよ、出來さる時よえ、一轉して料理屋入り再轉して妾とありたい之ら乃大望は下女よ能く有る事です、虎列刺病流行の折ふと主人の心添に餘り澤山食ないやうな子氣をお附よ乃一言を、下女根性には大佛の鐘よりも大きな響きです、裏の納屋の隅かどへ往て、テン

ヤ物を食ひながら「エ、やめまし」

食ぬ癖よ、食ぬと知りつゝ、お茶乃よろひ溜めなべて口きたかいた、下女根性です、主人の目を盗んで乃寝むり、買喰ひは、三飯の別科です、お坊さんと小楯よ取て、食物を買せるおどは、勿々の計略嬢様を煽り立ての芝居行などは、尤もおもしろい趣向です、下女と同格の乳母根性も又厭かものです、坊様嬢様を寝すとして、自分の眠を貪り乳を飲すが五月蠅サよ、胡椒の粉などを乳房よ、ぬりつけるトハ、随分酷です、思ふ我子よ思ひ比べて、養育するも乃え、乳母根性では無い、



第七回 女書生

女學士の卵子、男優りあるを尊むの學校もどりの高笑  
 ひ喃々たる話聲は、恐れ入ります某の令嬢とはお恥しい、  
 玄關番の書生を口説き、學校の教師も戀を仕懸け、果は  
 退校の恩命を受け玉ふとえ情かい、蓬頭亂鬢お獅子め  
 獅子の如よ、三世草の荒神様のやうよ、いやらーいおつ  
 びり、小倉の巾狭き帯も止て貰ひたい、怯めど臆せど我  
 獨顔よ、誰の前でも憚らぬ演説などは、やさしくもあ  
 毛糸スエッチの編物を、先づ初戀の贈物、ひびつきらん  
 プしきおどてす、寄宿おどせる遠國の女書生は取わけ

て女權の擴張家、自由結婚論者てす、先づ男女の交際が  
 必要だからトテ、隣室乃浪人某よ、シカも吉原で一敗、洲  
 崎で再敗、新宿で三敗、品川で四敗、板橋で五敗、小塚ッ原  
 で六敗して、零落乃谷底よ、借金の淵瀬よ、浮きつ沈みつ  
 せる某と、一夜の口論が不思議乃縁で、遂に終身を誤る、  
 ソレでも尙ほ高言して、靜肅の淑女だなど、抑も狂氣  
 の沙汰め、あほらしい、  
 ビール葡萄酒の嗜みは未だも、日本酒よての御酩酊、千  
 鳥足などえ、閉口てす、流行やつれての洋装、丸て茶番狂  
 言の女形てす、見らくも無い、お嗜みの都々逸おもたる



くもあゝい果は小説家氣取、ツマリ婦徳の無き徴證、あだ  
いやらゝい、

理化學、醫學、產婆學、畫學、植物學などは、女子に適當の學  
科です、ミルてムれ、バシホットてムれ、ホーセツトてム  
れ、荷も政治が、ッた書物は、女子よは大毒藥です、國家  
の制度、理財の方法などを、論議する女子は、褒めた話で  
無い、ローランド夫人を氣取ても、内心のだらしないの  
は、褒めた話でない、學校を卒業して、他人よ嫁が、老獨立  
よやふあど云ふ考も、大的違ひです、女子乃獨立を覺束  
ない、人類の自然の法則に違ふた話です、宜しくかい、社

會の惡き風俗乃手本です、尤も心得違ひです、  
甘くも辛くも何とも無い、ツマリ女の本性の幾分を欠  
てゐるのは、女生徒です、愛らしくも何とも無い、あべて  
不思議に、徳性を欠てゐる、美術心よは乏しい、飾るとい  
ふのは、女の性分だよ、……………

慰みや唱歌乃温習、敬神の意からトえ思はれかい、惡く  
すると迷信よ、陥り易い、が宗教を玩弄するとは、ハテ  
勿体ない、誰が未來乃賢母の良妻か、少しの物知だとして、  
女生徒の多數は、賢母よありさうもかい、良妻と云れさ  
うも無い、妙よ又醜女の多いこと、ハテあ……………



餘念も無く手鞠羽子つく時分よは可愛らうて温和  
 まうて、あどけないけれど、稍年長けて色氣が付きだす  
 と、顔つき目つき、自と變りて、言葉少よかり、何となうシ  
 ットリする者です、シカシ母親をいじり、髪乃物かどと  
 せがみ、又密よ金錢を私して、買喰ひするなどは、勿々止  
 むどころおやない、何な色黒お娘ても、年頃よなると、髪  
 飾りお化粧は情らあい、むつめたい親や、口乃悪い人よ  
 めくまて、鏡臺に向ふとは能く有る、十二三の時分、めら  
 まて、ソロソロ、様子を見るやうよある、裁縫のお師匠さ

んの所へ往く道すがら、互みよ上手下手乃批評、都會て  
 あらばお師匠様を勤めて、芝居ゆき、田舎でならば、草狩  
 神社佛閣もしくは、山遊び、赤い角紋が、鬚を離れて、風と  
 共に逃るるも知らぬ、赤い湯巻の間、めら、チヨロ、白  
 い足出して、鬼ごとなどするさま、見苦しい、ソラ糸を買  
 ふ、ソラ針を買ふとして、國庫の金を仰ぎ乍ら、感腎要の裁  
 縫はサテ置いて、押繪、紐飾り、細工物、紋帳、おどの、勉強、主客  
 其地位を轉換してある、シカシこの裁縫を習ふ處は未  
 しも、稽古屋え尤も、悪習の多い處です、あべて十七八の  
 娘は、勿論おてんば娘え、稽古屋へ往くのが、最上の樂み、



稽古屋は取も直さど淫猥しい事の周旋どころだもの  
……何處彼處の息子は大概他の娘をいけやふ下心三  
味線浄瑠璃端唄の節や調子を習ふといふのはうりや  
ホン乃申譯で娘としてもロクな稽古などを出来やう氣  
遣えなかい、

とき白粉水白粉、パツチリ牡丹香、丁子香、小町紅、あらひ  
粉、花筏、柳の露、香水、香油など皆を母親の臍栗を取出て  
買求め朝毎湯をついひ、其上風呂に入り、ペテユテは  
塗さびして、いつても寄集つた時よえ、何だの彼だのト、  
互ひよ親の小言などを云てゐる、サアさうかると、目の

上もしくは鼻の上の、一ツの黒子さへも氣よ懸つて、セ  
ウサンキンで焼たり、面瘡うばいす、猶更痘痕は氣よ掛  
るです可哀さうなのは娘の容貌あとき、或部分が不具  
あることです、

仕事を爲さして役者の話、演劇の話などする時え、仕事  
を打忘れて無心であるが、娘氣ほどあじぶ者は又ない、  
殊に物見高いは娘の常です、袖や袂で口を抑へて、オホ  
、オホ、と能く笑ふのは娘の常です、顔よ時あらぬ紅  
葉目よ時あらぬ時雨は能く感じるからです、ア、浮雲  
かい、井戸側の茶碗得て仕て、娘よは過ちが出来易い、



嫁の尻を母が被ッて家内無事と川柳點々も有る通り、  
 嫁は姑の氣が取ぐるしい姑は嫁の氣が知れ難い何處  
 乃家でも姑と嫁とを奥齒の物を挟んでゐる姑は箸の  
 こけたる迄も事々しう言ふも乃で嫁を何時も姑乃機  
 嫌顔を伺ふてゐる實は窮屈な嫁の境遇些の過失の  
 有つた時は一事が萬事だト意味を云れる孝行息子の  
 家では姑の權力矢鱈強くて多くを簾中に政事を聽  
 くといふ体裁です、  
 お寺参り、觀音大師あどへ参詣の道すがら嫁が辨當ま

ても入れて呉れた親切を喜ぶ姑が有れば嫁が小遣を  
 少く呉れさとして怒る姑が有る前世乃宿業犬と猿とが、  
 嫁と姑とは善くしてさへ中が悪いと褒められやふト  
 思ふたら嫁の苦勞は大した事です、  
 小舅といふもの有れば嫁を猶更四苦八苦です牡丹餅  
 一ツでも嫁を隠して嫁の子即ち孫に隠して自分の子  
 即ち嫁から見れば小舅を遣る姑が有る意地汚いは結  
 根性、  
 矢鱈無性な弟乃嫁を最負して兄の嫁を悪さまに罵り、  
 又自分の義子と密通しながら其嫁を悪むことは得て



仕て有ると嫁のお扮しを喧しう云ふて、自分を扮す姑  
え何だか臭いテ、

姑と一對の悪まれ者え繼母です、殊に連子してゐる繼  
母です、爲ぬ中だからトは能く云ふ事で、繼母も氣隨な  
息子や娘も懸ると繼母も辛めらうが、きびしい母に  
ゝると娘などは最も辛い朝三暮四を營むよ、心配はあ  
くとも、人よ知れぬ心配と云ふものが有る、ソレは繼母  
に、り、姑よ、り、又舅に口説れたりする嫁女が有  
る儘あらぬが、浮世ナンボ好きあふた夫婦でも、月よむ  
らくも花よは嵐邪摩が能くはいるも乃です、いじら

い世の中、あじきかい人の上、エ、自烈たいねエ、

第十回 穴のしこ

おぼりのことはうきよのならひぞと、

ゆるすころの、はてぞあしき、

小さな虫も殺なさんな、ト云へ、蠅や虱は格別、殺生  
は極悪の第一歩です、おら……邪見あ心を以て、人を痛  
めなさんな、

おもふこよ、つおもひとの、おもふこよ、

おもふわがこよ、おもひくらべて、

とすのらぬエ、心を曲てゐるおら、神佛を祈る人が有る、



けれどもソレは何よりもあらあら

こゝろだよ、まこと乃みちよ、めかひなば、

いのらどとしても、めみやまもらん

ト和歌よも有る、人は皆か心の直るが大切です、況て  
女え然うて無ければならぬ、ソレよ法律上の制裁は格  
別、道徳上の制裁を受け可き者を常に女よ多い、善い事  
よまれ、悪い事よまれ、女よは周旋好き、世話好きが多い、  
ソレ又しても失敗る、又しても前後の思慮さへ有れば  
好いが……ソレも無い、困ッ者です、  
男は春のやうで、女は秋のやうです、一は陽氣て他は陰

氣です、男乃心よを迷ひ乃霞たなびき易く、女の心よは  
憂むの雲めり易い、

女は自利心の深い者です、男は他愛心が多い、女を交際  
社會よ驅けては、直打が無い、男は家政などを管理する  
よは不適當です、一をおほまめ事よ執り、一をこまや  
め事よ執る、デスカラ男は社會の表面よ浮てゐて、女  
は社會の裏面よ沈んでゐる、云々男の事業は知れ渡ッ  
てゐて、女の事業は隠れてゐる、  
世よは女位として、輕蔑してゐる人が有る、だが女ほど怖  
るしい者は無い、七人の子を持ても、女よ肌身をゆるす、



なトは能く云ふてある女ほど喜憂の甚だしい者は無  
いゆら少と怨と結ぶ事が有るとソレを根に葉に持ッ  
て復讐の念が甚だしいソレが爲に一時前後を忘却  
て後悔する事が屢々あるデスカラ女よは大事かどと  
打明けることを出来ない齋藤利行や丸橋忠彌乃昔を  
憶ふても知れてゐるソレ又女は増長と易い者です  
高慢もあり易い者です勢を恃み籠に誇り易い者です  
デスカラ古來閨門の弊習と云ふものはその例よ芝  
くさい芝居や淨瑠璃もあるお家騒動といふのはた  
いてい其局や腰元が國君の寵にあまへて仕出かいた騒

動です

嘗た作者が「女子と美術心」といふ題で新聞に投書した  
とが有る今要略を摘んで之を陳べ尙ほ自分の他の考  
へを添へて申させう

女子よ美術心といふものが有る女子よ美術心の有  
るのは猶ほ船よ舵あるやうなものです女子よ是  
非美術心が無くてはあらぬ女子の美術心といふ  
のはヤレ白粉ヤレ髪飾りヤレ着物として何も彼もサ  
テおいて身体を飾ることです一念「美」といふものと  
離れては女子の本性を欠てゐると云ふても然る可



志です、シカも「美」は「善」と密接してゐるもので、此美は  
實に婦徳といふも乃、一ツでせう、

「美」を以て男兒乃敬愛を惹くものですが「美」は以て女子  
乃地位を保つものですが、女子よして其「美」を離れて美  
術心といふ者が無ったならば、一ツも直打は無、取  
どころを無い、

デスカラ女子よ美術心を必要です、美術心が有るか  
ら志して柔能く剛を凌ぐことか出来るのです、更言す  
れば女子の美術心は造化乃女子よ配せられたもの  
で、男兒よ敵對するところの、干戈な乃てす、此干戈が

無い時は、女子は如何志て、女子の体面を持あへて、  
往けませう、ソリヤ往け、

シカン誰ても女子が生れつき、自然よ美術心と云ふ  
者は有る、其美術心は何よもあらはれてゐる、静肅な  
舉動、やさしい心ばゑ、かどは皆な其美術心です、スレ  
ば誰てもあれ、女子は其本來の固有乃、美術心を保持  
して、その婦徳と密接してゐることを、忘れてはあら  
ない、

右乃美術心かい女は、女の本性乃幾分を欠てゐるもの  
で……資格の一ツを欠てゐるもので……變生男兒で



す女子とは云ません、女子でありながら、女子と云ひ  
あいなシテ見ると、其様な人は「妾も女の端じやもの」あ  
ど、云ふとえ出来ない。

ア、我ながら面白くも無い事を、くどくも喋舌た之  
もヤサモサと、細君の候補者を撰むに付て、心配を  
てあるゆらの事です、生來不得意な女の事なとを、殊  
よ拙い筆を以て、書く乃だもの……終是梅曆や金瓶  
梅を讀むやうな面白味は無い、ソリヤ無とも、又元よ  
り甚だお廉いんだもの……廉くッてお上品なもの  
を、尠い厭ふ人をお止よ、お止おさッたら、又穴を採し

て書をまはさう、サアどうです、先は之よて筆止めえろ、  
あゝあゝ

穴  
終



版權登錄

明治廿一年十二月十八日出版  
全 年十二月十五日刷成

著作  
兼  
發行者

大阪東區內本町二丁目百卅九番屋敷

藤谷虎三

印刷者

大阪東區高麗橋五丁目四十五番屋敷

大垣彌太郎

發賣者

大阪東區唐物町四丁目十二番屋敷

岡本仙助

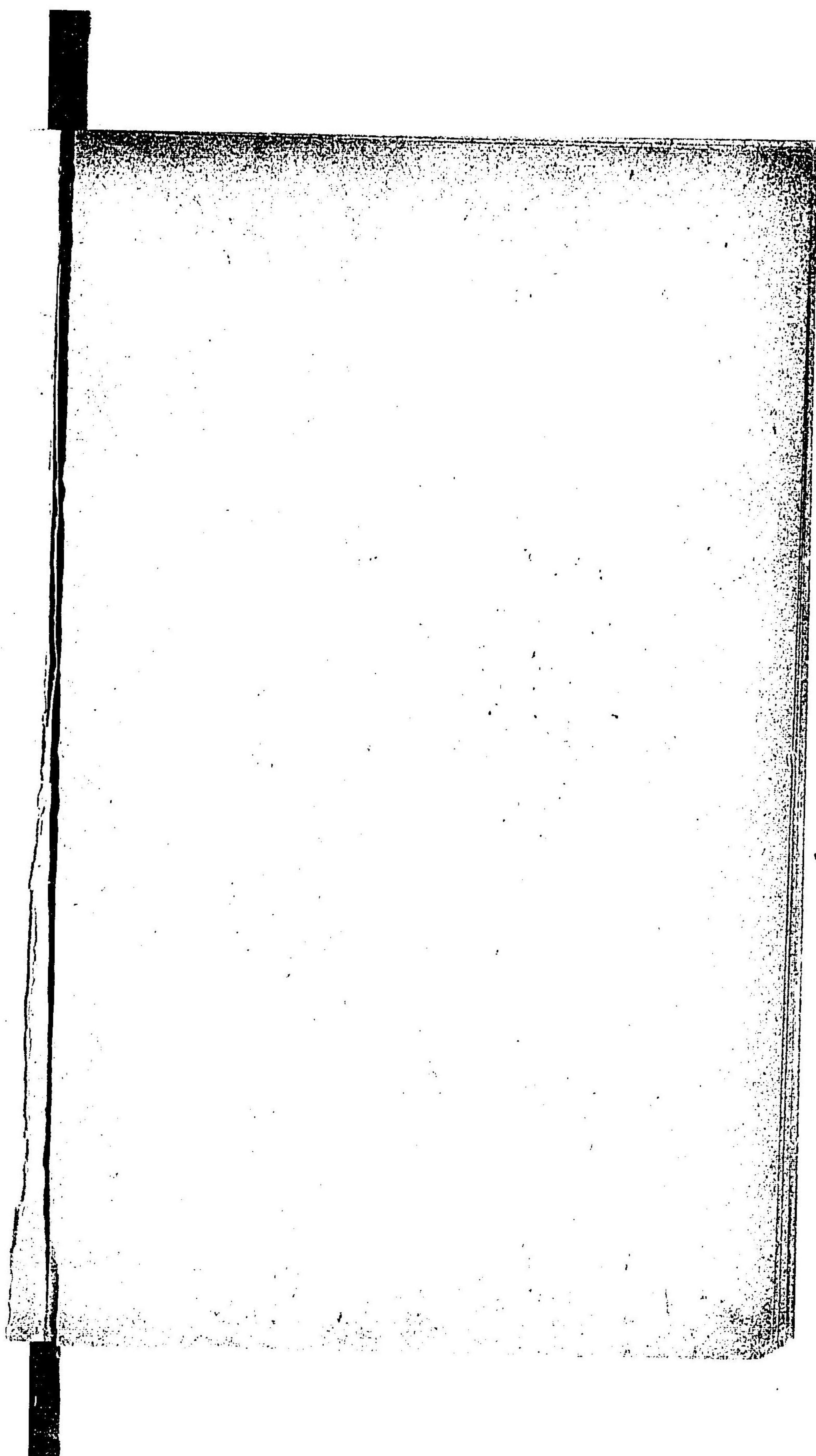
發賣者

大阪南區末吉橋三丁目八十九番屋敷

中村芳松



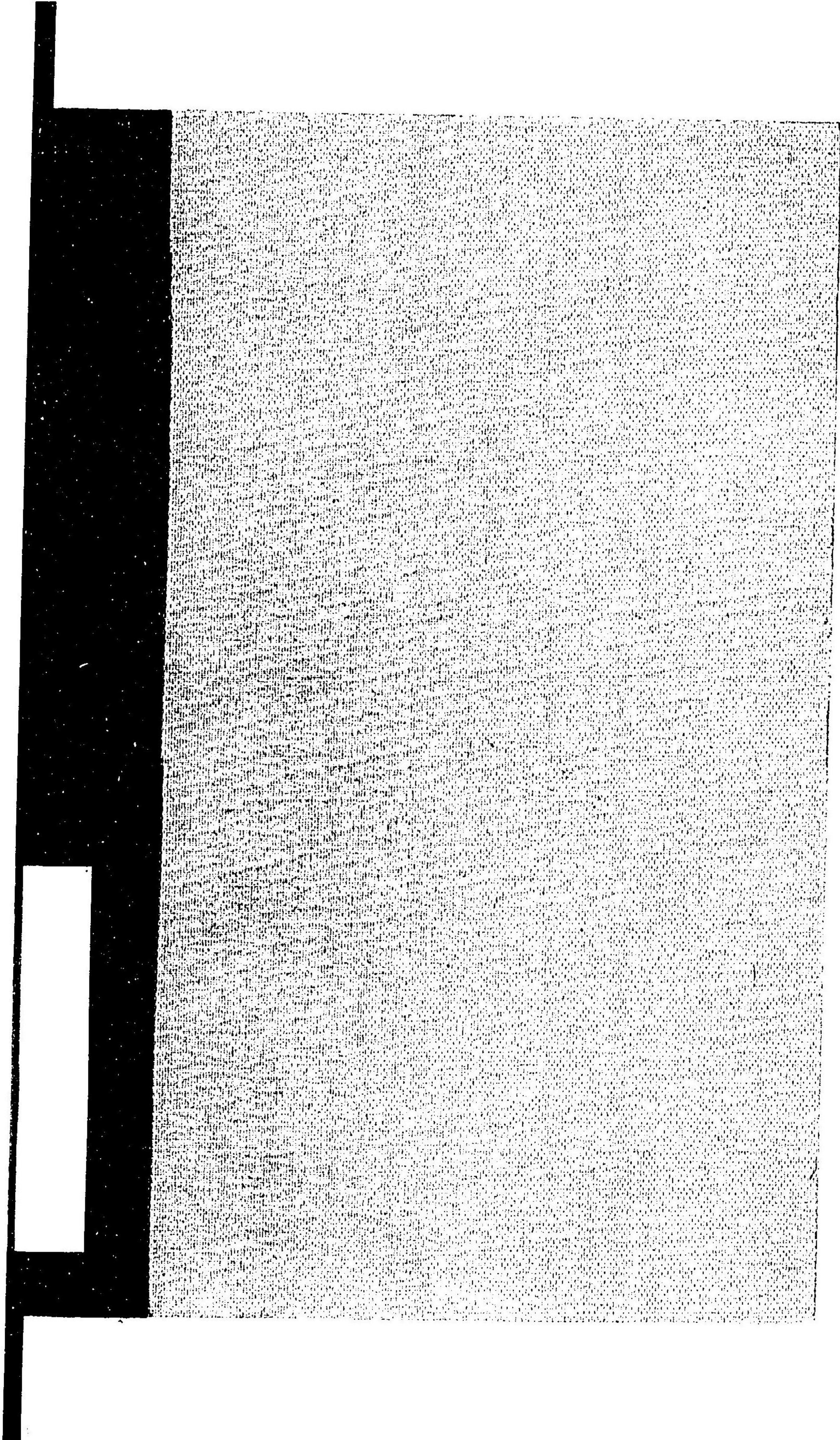






EX 222







特29

828

091565-000-6

特29-828

穴

素鉄公/著

M21

DBO-0009





